

新領域・総括班・国際活動支援班合同 第一回研究報告会（2016 年 9 月 4 日）

研究報告タイトル：

「トルコ・7.15 クーデタ未遂事件の持つ意味合い - エルドアン大統領の強権化とギュレン運動の破綻 - 」

報告者：幸加木文（千葉大学 特任研究員）

要旨：

2016 年 7 月 15 日夜に発生し、その直後に鎮圧されたトルコのクーデタ未遂事件において、トルコ政府に首謀者と名指しされたのが、イスラーム知識人のフェトウッラー・ギュレンを精神的指導者とする市民社会運動「ギュレン運動」であった。国際的な耳目を集めながらも実態が十分には知られていないギュレンという人物とその運動について、クーデタ関与に関する 8 月末までの報道をまとめつつ、彼らの顕著な特徴およびその近年の変化について概観した。さらに、かつては協力関係にあったとされる与党・公正発展党との関係性の変化がどの時期に見られたのかを、関連事象を時系列に検討することで明らかにし、また「イスラーム派」内の対立という観点から両者の主張を比較した。こうした検討から、両者の関係性が協力から対立へと変化したのは、軍部の力を削ぎ、エルドアン首相（現在は大統領）が権力掌握に自信を深めた 2011 年前後と見られること、また今回のクーデタ未遂事件は、2013 年 12 月におきた与党政治家らの汚職事件により表面化した両者の非対称な対立の延長にあること、そしてギュレン運動内部でも、特に若年層にこれまでの手法への懐疑と動揺が広がっていることなどを指摘した。